

八州軒が三溪園に移築されるまで

江戸時代

食家の没落

江戸時代・元禄の頃は長者番付にも名があった食家ですが、十代日本家に至り衰退が始まります。天保三年（一八三三）春日出新田の一部と米蔵、八州軒を含む屋敷・庭園等を抵当に入れますが、借金返済がまかりならず、翌年には引き渡しとなります。

食家の没落は、幕末に廻船業がふるわなくなり、明治時代の廃藩置県の際には、大名への貸付金がほとんど返金されなかったためとされます。そうして、八州軒の所有者は、のちに春日出の両替商・清海家へと移るに至りました。

明治時代

原三溪が八州軒を購入

原三溪が八州軒を購入したのは、明治三十九年（一九〇六）のこと。所有者の清海家から、三溪が懇意にしていた古美術商の今村甚吉に売込みの話があったことから、今村が三溪に話を持ちかけ、仲介役となりました。

八州軒は当時かなり荒廃しており、買い手がつかなかったようです。当初は三溪もあまり関心を示していませんでしたが、話があった二ヶ月後、絵図を取り寄せてほしいと今村に依頼しています。このとき制作された絵図が、「春日出新田建築図」とされています。図をみると、浪華十詠和歌色紙が欄間の位置に確認できます。

大正時代

三溪園に移築

半年にわたる購入価格等の交渉を経て、三溪は八州軒を入手しますが、移築完了に至るまで、実に十一年の歳月を費やしました。どこにどのような配置で建てるか構想を重ね、移築を始めたのは大正四年（一九一五）のことでした。これは、前年の大正三年（一九一四）旧燈明寺三重塔が丘上に据えられたことで、建物内からの眺望が定まり、配置構想が定まったためとされています。長男・善一郎の婚礼に間に合うよう、大正六年（一九一七）に完成し、「臨春閣」と名を改めた建物は、原家の大事な人生の節目を彩り、多くの人々が集う場となりました。

※臨春閣の外観は、屋根の素材や形、池に面して三つの棟を奥にずらしながら連結させた建物の配置など、三溪が自ら理想とする形に変えています。内部を彩る障壁画や数寄屋風書院造りの意匠等は、移築前のものをほぼ踏襲し、現在に伝えられています。